鮮やかな夏の初体験①〜⑤＋まとめ本限定短編
DLsite 用体験版

【体験版について】
本体験版には、第①作「俺と彼女のはじまり」の冒頭を収録しています。
製品版には、第①作〜第⑤作と、まとめ本限定短編を収録しています。
既刊①〜⑤をお持ちの方は、収録内容の重複にご注意ください。

この作品に登場する人物はすべて 18 歳以上の成人です。実在の未成年・学校・団体とは関係ありません。

鮮やかな夏の初体験①〜俺と彼女のはじまり〜
登場人物：孝史・里桜

　夏の日差しが、肌にまとわりつくように重くのしかかる。
　今日は俺の誕生日。そして、もうひとつ――特別なイベントの日だ。
　家へ向かう道の途中、俺たちは珍しく会話をしなかった。
　いつもなら他愛もないことで笑い合い、歩幅を合わせて歩くのに、今日は違う。
　繋がれていない手。彼女のスカートの横で、華奢な指が小さく揺れている。
半分ひらいたその手は、差し出せばすぐにでも俺の手を受け入れてくれそうだ。
　手を伸ばそうと思うのに、指先が震えて止まってしまう。緊張のせいか、掌にはじっとり汗が滲んでいた。――いや、たぶんそれだけじゃない。今日はどうしても、そんな気分になれなかった。
　ミーンミーンと蝉の鳴き声が、四方八方から耳を埋め尽くす。
　ふと視線を落とすと、道端に転がる一匹の蝉の死骸が目に入った。
　彼らは、一週間で死んでしまうのか……。
　土の中で過ごす長い時間は、一体どれくらいなのだろう。
　そんな取りとめのない考えに逃げながら、俺は「これから」のことから必死に意識を逸らしていた。
　彼女の方へ視線を向ける。
　背筋はいつものようにぴんと伸びて、まっすぐ前だけを見据えている。
　少なくとも、俺みたいに落ち着きをなくしているようには見えなかった。
――その横顔に見入っていた俺の視線に、彼女がふと気づいたのか
「ねぇ、本当に今日は……家に誰もいないの？」
　彼女は心配そうに声を落とした。
　その仕草を見て、やっぱり彼女も少しは緊張しているんだと思う。
「うん、いないよ」
俺はできるだけ柔らかい声で答え、安心させようとした。
「……そう」
返ってきたのは、どこか素っ気ない一言。

いつもの彼女なら、そこから冗談のひとつでも続けるのに――今日は違った。
やっぱり、こういうのって良くないのかなぁ――。
期待と後悔が、胸の奥でぐるぐると渦を巻いていた。
家に着いて玄関の扉を開けると、二人で静かに敷居をまたぐ。
彼女は革のフラットシューズを丁寧に脱ぎ、決まって隅へと揃えて置いた。
俺はというと、立ったまま靴を雑に蹴り脱ぐ。
その無様な靴を見て、彼女は何も言わず、そっと並べてくれる。
俺はそれを見ていると、
「どうしたの？」と聞かれて、唇を噛んだ。――きっと、それも彼女なりの気持ちなのだろう。
立ち上がった彼女は、しばし迷うように視線を泳がせる。
おそらくシャワーを浴びるかどうかで悩んでいるのだろう。
普通なら、俺がその流れを作るべきなのに――。
「暑かったでしょ？お茶持ってくるから、俺の部屋にいて」
彼女は戸惑ったように足を止め、「でも……」と小さく声を漏らす。
気にしているのはわかる。それでも――。
「大丈夫だから、先に二階へ行ってて」
俺はできるだけ柔らかい声音で、そう訴えかけた。
「……わかった」
彼女は小さく頷き、ゆっくりと階段を上がっていく。
一段ごとに揺れるスカートが、視線を誘う。
今にも、その奥が覗けてしまいそうで――
今日はどんな下着をつけているのだろう。
そんな邪な想像を頭の片隅に浮かべながら、俺はリビングへと足を向ける。
冷蔵庫から取り出したのは、コップ二つと、1.5 リットルの緑茶のペットボトル。
これも今日のために、昨日の夜わざわざ自分で買ってきたものだ。
親に頼めば余計な詮索をされそうで、それが嫌だったから。
彼女はカフェインにすぐ反応してしまう。
だから選んだのは、できるだけカフェインの少ない緑茶だった。
コップを落とさないよう気を配りつつ、鞄を背負い直して二階へ上がった。
俺が入ってきたのに気づくと、不安と、もうひとつ別の感情が入り交じった表情でこちらを見つめてくる。
……わかってる。彼女も、やっぱり緊張しているんだ。
テーブルにコップを並べ、お茶を注ぐ。
それを見た彼女は、ふと首を傾げた。
「今日は……緑茶なのね」
いつもは麦茶だから、不思議に思ったのだろう。
「うん、一応ね」
俺の曖昧な返事の意味を察したのか、彼女は黙って口をつけた。
「はぁ、暑かったぁ」

小さく愚痴をこぼす声に、俺はハッとする。
「あ、ごめん。クーラーつけて無かったね。なんでつけなかったの？」
彼女はちょっと間を置いて、
「……ごめん、忘れてた」
里桜は笑った。――今日、ようやく見せてくれた、彼女らしい笑顔だ。
俺もつられて口元を緩めながら、リモコンでクーラーをつける。設定温度は、いつもより少し低めにした。
「孝史も、座りなよ」
促されるままに、俺は彼女の正面に腰を下ろす。
乾いていた喉が気になり、自然と緑茶のコップへ手が伸びた。
ひと口飲んで、ふぅ……と息をつく。
その瞬間、里桜がにっこりと微笑んで言った。
「孝史、誕生日おめでとう」
可愛いえくぼが見えた。
「ありがとう」
俺も笑顔で返す。
「――もちろん、覚えているよね？」
その問いかけに、心臓が強く跳ねた。
クーラーの低い駆動音が、部屋に響いている。
カーテン越しに差し込む夏の日差しが、じわりと肌を照らした。
「うん、覚えてる……」
「平気？」
「えっ……？　な、何が？」
彼女はわずかに目を細め、声を落とす。
「孝史も……初めてなんでしょ？」
彼女は少し不安そうに問いかけてきた。
「うん、そうだけど……。里桜だって初めてでしょ？」
「そうだよ。だから――今日を選んだんだよ。君の誕生日に」
彼女はやわらかい笑みを浮かべてそう答える。
けれど、その声音の奥には、ただの優しさではない……しっかりとした覚悟が感じられた。
「ありがとう」
そう、俺が言うと彼女はクスクスと笑った。
「まだ早くない？」
からかうように言いながら、彼女は少し身を寄せてくる。
対面に座っていた俺らの肩が、そっと触れ合った。
「……暑いね」
彼女がぽつりとつぶやく。
「里桜のせいで、余計に暑い」
「だって、夏で……今帰ってきたばかりだもん」

「そりゃ、ね」
　そう答えたところで、彼女はふと何かを決心したように口を開いた。
「……それとも、別の意味で体が暑くなってるのかな？」
　上目づかいで俺を覗き込み、からかうように問いかけてくる。
そんな意地悪な彼女に、ちょっとイラッとした。
　――こっちの気持ちもわかってほしい、なんて一瞬思ったけれど、すぐに気づく。
　これも彼女なりに、場を和ませようとしているんだ。
「……うん、そうだと思う」
　それが俺の、ささやかな決心の答えだった。
　彼女は片手をテーブルにそっと置いた。
　俺はその小さな華奢な手を、包み込むように重ねる。
「……硬い、いつもの手だね。今日は繋いでくれなかったから」
「うん。気づいてたんだ」
「当たり前でしょ？いつもは人混み避けると、すぐに手を繋いでくるのに」
「……だって、緊張してたんだもの」
　俺は正直に、素直な気持ちを口にした。
「うん、なんとなく気づいてた。けど、今ので確信した」
「今？」
　俺は首を傾げた。
「だって、孝史の手……手汗すごいんだもん」
　里桜はクスクスと笑った。
「あ、ごめん！」
　慌てて手を離そうとした瞬間――。
「ダメ！」
　彼女は逆に、ぎゅっと俺の手を握りしめた。
　そこで温もりに気づく。
「……君の手、汗かいてるじゃん」
　そう。里桜も、同じ気持ちで緊張していたのだ。
「君の汗と……私のこの汗って同じものなの？」
　彼女が静かに問いかける。その声音には、からかいの色はなく、ただ純粋な気持ちが滲んでいた。
「……うん、そうだよ」
　俺は素直に答えた。
「……わかった」
　小さく頷いた彼女は、そのまま俺の唇に自分の唇を重ねてきた。
　目を閉じる直前の彼女の表情――その儚げな顔が、俺は何より好きだった。
　そして俺も、そっと目を閉じる。

――体験版はここまでです――

二人の物語の続きは、製品版でお楽しみください。
製品版収録内容：第①作～第⑤作＋まとめ本限定短編